

研究室だより

(2011年4月1日～2012年3月31日)

- 馬場聡氏は、4月、准教授に就任。
- アレックス・ワトソン氏は、4月、講師に就任。
- 佐々木周子氏は、4月、助手に就任。
- 内山加奈枝講師は、4月1日から3月31日まで国内研修。
- アン・スレイター准教授は、4月1日から9月20日までサバティカル。
- 坂田薫子准教授は、4月、日本英文学会『英米文学研究』関東支部編集委員に就任。
- 佐藤和哉教授は、4月、「共感の行方——書きかえられる『ロビンソン・クルーソー』」を見市雅俊(編)『近代イギリスを読む——文学の語りと歴史の語り』(法政大学出版局)に執筆。
- 藤井洋子教授は、4月24日、第4回日本英語学会国際春季フォーラム2011(於静岡大学)にて司会を務める。
- 松森晶子教授は、5月21日、「隠岐島3型アクセントの再解釈」を国立国語研究所主催公開シンポジウム「N型アクセントの原理と成立」(於神戸大学)にて分担口頭発表。
- 佐藤和哉教授は、5月22日、第83回日本英文学会大会(於北九州市立大学)シンポジウム「大学における英文読解を見直す」の司会を務める。
- 坂田薫子准教授は、6月、「オースティンとカントリーハウス」を『ジェイン・オースティン研究』(日本オースティン協会)第5号に執筆。
- 高梨博子准教授は、6月、“Introduction: Reframing Framing: Interaction and the Constitution of Culture and Society”を共著にて、また、“Complementary Stylistic Resonance in Japanese Play Framing”を単著にて、Special Issue: “Reframing Framing: Interaction and the Constitution of Culture and Society” *Pragmatics*, Vol. 21, No. 2 (Edited by Hiroko Takanashi and Joseph Sung-Yul Park) に執筆。
- 英語英文学会主催の春季講演会が、6月9日、開催された。講師はアレックス・ワトソン氏(本学講師)。演題は“Romantic Marginality: Why Annotation Matters”。
- 島田法子教授は、6月25日から26日まで、日本移民学会第21回年次大会(於国際協力機構横浜国際センター)に出席、自由論題の司会を務める。
- 川端康雄教授は、7月、「資料紹介 成瀬仁蔵インタビュー——『ニューヨークタイムズ』1912年11月10日」を『成瀬記念館』No. 26に掲載。まえがき、インタビュー記事の翻刻、翻訳(共訳)を担当。
- 馬場聡准教授は、7月、多民族研究会の事務局長補佐、及び会計委員に就任。
- 新見肇子教授は、7月2日、「イギリス・ロマン派学会関東地区例会 第97回四季談話会」(於大妻女子大学)にて司会を務める。

- 藤井洋子教授は、7月2日から10日まで、第12回国際語用論学会に出席、研究発表のため、連合王国、マンチェスター大学へ海外出張。7月7日、“Interchangeability of First and Second Person Pronouns—An Interpretation in Terms of Theory of ‘ba’—”をパネル“Emancipatory Pragmatics: Cultural and Interactional Context Revisited”にて口頭発表。
- 高梨博子准教授は、7月2日から10日まで、第12回国際語用論学会に出席、研究発表のため、連合王国、マンチェスター大学へ海外出張。7月7日、“Context as Socio-Cultural Resources and Consequences: The Case of Complementary Stylistic Resonance”をパネル“Emancipatory Pragmatics: Cultural and Interactional Context Revisited”にて口頭発表。
- 馬場聡准教授は、7月16日、「シー・アイランズの亡霊・記憶・歴史——グロリア・ネイラーの『ママ・デイ』を中心に」を多民族研究学会第16回全国大会（於国士舘大学世田谷キャンパス）にて口頭発表。
- 藤井洋子教授は、7月28日、“Referential shifting between the first and second person pronouns in Japanese”を第20回国際歴史言語学会（於国立民族学博物館）のワークショップ“Person Forms across Time and Space”にて口頭発表。
- 松森晶子教授は、7月29日、“The accentual system of Tokunoshima Okazen dialect in which the accent is uniquely marked with vowel duration”を第20回国際歴史言語学会（於国立民族学博物館）にて口頭発表。
- 松森晶子教授は、8月、「数詞のアクセントを通してみた喜界島語彙の音韻特徴」を『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究——喜界島方言調査報告書』（国立国語研究所）に執筆。
- 松森晶子教授は、8月、「日本語のアクセント」を城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男共編『音声学基本事典』（勉誠出版）に執筆。
- アレックス・ワトソン講師は、2011年8月2日より9月2日まで、連合王国ロンドン、エジンバラへ資料収集のため海外出張。
- 大場久恵助教は、2011年8月6日より8月24日まで、アメリカ合衆国カリフォルニア州、アリゾナ州へ資料収集のため海外出張。
- 佐藤和哉教授は、8月15日から31日まで、連合王国ロンドン、オクスフォードへ資料収集のため海外出張。
- 川端康雄教授は、8月30日から9月12日まで、科学研究費補助金助成研究「アーツ・アンド・クラフツ運動と民芸運動」に係る調査のため、連合王国ロンドンに海外出張。
- 高梨博子准教授は、8月31日、「遊びのフレーミングの言語的指標——日本語会話のデータから」を「話し言葉の言語学」第2回ワークショップ「データ分析の最前線」（於東京大学駒場キャンパス）にて口頭発表。
- 川端康雄教授は、9月、“‘A Narrative of Unsolved Cases’: A Reading of *The Fight for Manod*”を *Key Words: A Journal of Cultural Materialism* 9 (The Raymond Williams Society) に執筆。
- 川端康雄教授は、9月、編著『愛と戦いのイギリス文化史 1951–2010年』を

- 慶應義塾大学出版会より刊行。
- アン・スレイター准教授は、9月、短編“The Open World”を *Shenandoah* Vol. 61, No. 1 に執筆。
 - 坂田薫子准教授は、9月、「ハーディとカントリーハウス——ジェイン・オーステインとの比較を通して」を『ハーディ研究』（日本ハーディ協会）第37号に執筆。
 - 馬場聡准教授は、9月、「〈ポップ：Arts & Culture〉 倍増 BS 競争激化——開局無料放送で攻勢」（朝日新聞 2011年9月17日（夕刊）3面）にコメント記事を執筆。
 - 島田法子教授は、9月5日から14日まで、アメリカ合衆国ハワイ州立大学マノア校へ資料収集のため海外出張。
 - 三神和子教授は、9月10日、『青鞥』創刊100周年記念国際シンポジウム「今、世界が読む『青鞥』」（日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画、於日本女子大学）において司会を務める。
 - 植野貴志子助教は、9月18日、「日本語会話における聞き手行動——対話相手に応じた使い分け——」を第28回社会言語科学会研究大会（於龍谷大学）にて口頭発表。
 - 三神和子教授は、10月1日、英文学科長に就任。
 - 松森晶子教授は、10月、日本学会会議連携会員に就任。
 - 川端康雄教授は、10月、翻訳書ジョン・ラスキン『ゴシックの本質』（みすず書房）を出版。
 - 川端康雄教授は、10月、「世直しの夢と挫折——ジョン・ラスキンとウィリアム・モリス」を向井秀忠・近藤存志編著『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』（音羽書房鶴見書店）に執筆。
 - 佐藤達郎准教授は、10月、「ヒエロニモの沈黙——『スペインの悲劇』における作者と権力」をソートン不破直子・内山加奈枝編著『作品は「作者」を語る——アラビアン・ナイトから丸谷オ一まで』（日本女子大学叢書12）（春風社）に執筆。
 - 内山加奈枝講師は、10月、「夏目漱石が現代批評に与える「生きたもの」——『ころ』における主体と倫理」をソートン不破直子・内山加奈枝編著『作品は「作者」を語る——アラビアン・ナイトから丸谷オ一まで』（日本女子大学叢書12）（春風社）に執筆。
 - アン・スレイター准教授は、10月、短編“Travelers”を *Gulf Coast* No. 24, Issue. 1 に執筆。
 - 大学院英文学専攻修士論文中間発表会が、10月1日、開催された。博士課程前期2年次6名が修士論文の中間発表を行った。
 - 佐藤和哉教授は、10月9日、「マザー・グースの世界——マザー・グース／童謡／児童文学」を（社）日本女子大学教育文化振興会桜楓会米子支部・「本の学校」生涯読書をすすめる会共催の講演会にて招待講演。
 - 藤井洋子教授は、10月15日、「課題達成のための言語コミュニケーションに

- 観られる自己と他者——日英語比較研究——」を研究シンポジウム「コミュニケーションのダイナミズムと社会形成——自然発話データから——」（日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画、於日本女子大学）にて口頭発表。
- 高梨博子准教授は、10月15日、「スタイルで遊ぶ——自然発話における社会・文化的役割像のイデオロギーの共創」を研究シンポジウム「コミュニケーションのダイナミズムと社会形成——自然発話データから——」（日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画、於日本女子大学）にて口頭発表。
 - アン・スレイター准教授は、10月16日、“Setting Your Story in a Foreign Country (and a Few Thoughts on Getting It Published)” を第5回 JWC (Japan Writers Conference) (於神戸松蔭女子大学) にて口頭発表。
 - 坂田薫子准教授は、11月、「英国小説のキャノンと帝国——『ジェイン・エア』の場合」を『イギリス文学のランドマーク』（大阪教育図書）に執筆。
 - 大場昌子教授は、11月、創立110周年記念式典において、ウェルズリー・カレッジ学長記念講演の通訳を務める。
 - アン・スレイター准教授は、11月、“Orchards: Japan in a Young Adult Verse Novel” を SWET (Society of Writers, Editors & Translators) Newsletter, No. 129 に執筆。
 - 大場久恵助教は、11月、「読書教育と図書館——日米学校図書館の役割についての一考察」を『日本女子大学総合研究所紀要』第14号に執筆。
 - 藤井洋子教授は、11月12日、第29回日本英語学会大会（於新潟大学）にて司会を務める。
 - 植野貴志子助教は、11月12日、「日英語会話における聞き手行動の社会言語学的考察」を日本英語学会第29回大会（於新潟大学）にて口頭発表。
 - 英語英文学会の秋季講演会が、11月22日、開催された。講師は山崎真稔氏（元玉川大学教授）。演題は「ニュージーランド作家の英語——Witi Ihimaera の場合——」。また、大学院生2名による研究発表も行われた。発表者は、イギリス文化研究から博士課程前期2年春日友里。発表タイトルは「*The Inheritors* における人間の表象をめくって——文学研究への招待——」。アメリカ文学から博士課程後期1年秋田万里子。発表タイトルは「機械から創造者へ——Cynthia Ozick の“Dictation”における『作者』の問題——」。講演と発表に先立ち、平成23年度 E. G. フィリップス賞の授与式が行われた。受賞者は3年次桑原佑佳、長南明花里、4年次水沼かおり、山本蘭。
 - 松森晶子教授は、12月、(短信)「隠岐島五箇方言の『式保存』とその例外について」を『音声研究』第15巻3号(日本音声学会)に執筆。
 - 大学院英文学専攻課程協議会第45回研究発表会が、12月3日、法政大学にて開催された。本学大学院より、博士課程前期2年春日友里、博士課程後期1年秋田万里子、博士課程後期2年保谷朋子が発表。アドバイザーとして松森晶子教授、大場昌子教授、佐藤和哉教授が出席。
 - 川端康雄教授は、12月10日、日本ワイルド協会第36回大会（於東京女子大学）にてシンポジウム「ワイルドと世紀末ロンドンの諸相」の司会および講師

を務める。

- 藤井洋子教授は、12月10日、“Differences between Japanese and American English Speakers in the Situating of Self in the Field/*Ba* of Interaction”を「場の言語学」の国際ワークショップ(於早稲田大学)にて口頭発表。
- 松森晶子教授は、12月11日、国立国語研究所主催“International Conference on Phonetics and Phonology”のセッションにて司会を務める。
- 川端康雄教授は、12月17日、歴史と人間第200回研究会にて見市雅俊編『近代イギリスを読む』(法政大学出版局)合評会のコメンテーターを務める。
- 大場昌子教授は、12月18日、「ユダヤ系女性作家のホロコースト表象——ノーマ・ローゼンの場合」を日本ソール・ペロー協会東京支部例会(於青山学院大学)にて口頭発表。
- 馬場聡准教授は、12月18日、多民族研究学会第17回全国大会(於松山大学)にてワークショップの司会を務める。
- 植野貴志子助教は、1月7日、「聞き手行動と社会的関係の構築」を「話し言葉の言語学」第3回ワークショップ(於慶応大学)にて口頭発表。
- 川端康雄教授は、2月、「21世紀の生のためのキーワード——新しい批評の言葉第23回芸/芸術」を『Web英語青年』第157巻第11号(総号1957号)に執筆。
- 川端康雄教授は、2月、小野二郎『ウィリアム・モリス通信』(みすず書房)の編者を務める。同書の編者解説として「小野二郎の批評的モリス紀行」を執筆。
- 藤井洋子教授は、2月10日から15日まで、科学研究費補助金助成研究のデータ収集のためタイ王国へ海外出張。
- アン・スレイター准教授は、2月11日より20日まで、San Francisco Writers Conference 出席のため、アメリカ合衆国カリフォルニア州へ海外出張。
- 川端康雄教授は、2月25日、『『ゴシックの本質』を訳して』を東京ラスキン協会のラスキン・ティーパーティにて講演。
- 大場昌子教授は、3月、『笑いとユーモアのユダヤ文学』(南雲堂)を共編著にて出版。
- 島田法子教授は、3月、「ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動——移民の同化とアイデンティティ形成に関する一考察——」を『海外移住資料館 研究紀要』第5号に執筆。
- 新見肇子教授は、3月、「シャーロット・スミスの手紙を読む——詩作と交渉」を新見肇子・鈴木雅之編著『揺ぎなき信念——イギリス・ロマン主義論集』(彩流社)に執筆。
- 藤井洋子教授は、3月、“Differences of situating Self in the place/*ba* of interaction between the Japanese and American English speakers”を *Journal of Pragmatics* に執筆。
- アン・スレイター准教授は、3月、短編“Aftershocks”を *Tomo* (Stone Bridge Press) に執筆。

- 馬場聡准教授は、3月、「書評：移動する文化、駆動する物語」を『多民族研究』第5号に執筆。
- アレックス・ワトソン講師は、3月、*Romantic Marginality: Nation and Empire on the Borders of the Page* (Pickering and Chatto) を出版。
- アレックス・ワトソン講師は、3月、“Village Politics: Imagining the Lowlands in John Gibson Lockhart’s *Adam Blair* (1822)” を新見肇子・鈴木雅之編著『揺ぎなき信念——イギリス・ロマン主義論集』（彩流社）に執筆。
- 植野貴志子助教は、3月、「日英語会話における聞き手行動の社会言語学的考察」を JELS 29 に執筆。
- 坂田薫子准教授は、3月、「英国小説のキャノンと帝国——『嵐が丘』の場合」を『日本女子大学文学部紀要』第61号に執筆。
- 植野貴志子助教は、3月、「聞き手行動の社会言語学的考察——語りに対する聞き手の働きかけ——」を『日本女子大学紀要文学部』第61号に執筆。
- 佐々木周子助手は、3月、“Hemingway’s Two Female Characters: A Psychological Reading” を『日本女子大学文学部紀要』第61号に執筆。
- 川端康雄教授は、3月、「ケルムスコット・プレスのオスカー・ワイルド——世紀末・社会主義・ロマンス」を『英米文学研究』第47号に執筆。
- 佐藤和哉教授は、3月、「「巨人殺し」の(ユニオン) ジャック——民衆ヒーローの暴力性に関する覚書——」を『英米文学研究』第47号に執筆。
- 三神和子教授は、3月、「生体解剖反対運動におけるフランシス・パワー・コブの主張」を『英米文学研究』第47号に執筆。
- 佐藤達郎准教授は、3月、「Sir John Harington 訳 *Orlando Furioso* におけるアリュージョン」を『英米文学研究』第47号に執筆。
- 坂田薫子准教授は、3月、「英国小説のキャノンと帝国——『マンスフィールド・パーク』の場合」を、『英米文学研究』第47号に執筆。
- アレックス・ワトソン講師は、3月、“Translating India: Geopolitical Identity in Elizabeth Hamilton’s *Translations of the Letters of a Hindoo Rajah* (1797)” を『英米文学研究』第47号に執筆。
- 馬場聡准教授は、3月28日、公開ワークショップ「アメリカ文学における〈ロード〉の物語学」（日本女子大学文学部主催学術交流企画、於日本女子大学）の座長を務め、「アメリカ文学におけるロード・ナラティブの伝統」を口頭発表。
- 新見肇子教授は、3月31日、定年により退職。